〔全体の評価講評：多機能型事業所〕

平成27年度

《事業所名：広域地域ケアセンター　バオバブ》

No.	特に良いと思う点	
1	タイトル	重度の障害者自ら、職員と共に、地域で生き、働くことを実践している
	内容	本施設は、重度加算を取得している事業所であるが、働く場であることという信条を、職員と利用者が共有して実践し、重度であっても、"働くことで輝く場"を実現している。その実現の鍵は、ひとつには共に生き共に働く理念が施設全体に行き渡り、本人が自分で仕事を決め、選択する基本の尊厳が実行されている点をあげたい。食事は来客も施設長も利用者と共にいただき、利用者が自由闊達に過ごしている。二点目には、市内1200軒の資源回収をはじめとして、障害者が毎日地域にでて活動領域を拡げ、豊かな社会的交流を継続している点にある。
2	タイトル	住み続ける地域とするために、地域とつながり、他施設との連携を大切にしている
	内容	資源回収などの作業を地域に向けて行っており、地域とのつながりはかなり作られている状態である。それにくわえて同地区でもう一つの施設やグループホームを作る活動も行っており、地域の福祉により関わっている。当施設の利用からもう一つの施設に移って訓練をして、もう一度同施設に戻ってくると言うことも行われるようになっており、二つの施設での連携した支援の展開が行われている。二つの施設が共同して地域の障害のある方の支援としていろいろな関わりが持てるようになっている。
3	タイトル	障害状況に関わらず社会人として自立した生活が営めるような取り組みを行っている
	内容	利用者一人ひとり生活が自立できるよう、働くために毎日出勤できることを念頭にしている。初めて利用する方は、障害の種類や重さに関わらず全員自立訓練に所属し、社会人として仕事を中心にした生活リズムを身に付け、休まず来れる事を第一としている。重度の方＝内職と決めるのではなく、作業を行った結果何が出来たか本人が選択できるよう、全員が全作業を経験し可能性を見出している。期間内の作業により利用者の選択が広がると共に、職員は利用者状況の把握がしっかりと出来ることで、今後に向けた支援に繋がる取り組みを行っている。
No.	さらなる改善が望まれる点	
1	タイトル	中長期計画や事業計画を職員や利用者に伝わる形で作成し、施設の前進に活用してほしい
	内容	中長期計画はまだ作成途上であるが、着々と実行に移され、実績が積み重ねられてきている。これらは、組織全体の目標を定めるためにも、早期に、形にしておきたい。事業計画は、年度の振り返りを踏まえて作成し、事業報告とあわせて、理事会で承認をしており、事業推進の根拠である。事業報告は毎年、職員、利用者や家族にも報告をしている。これらは、働く場で健闘する利用者、それの実現を支える職員など、組織全体の行動の目標と、その結果であることから、関係者が成果を実感できる計画の作り方を探り、今後の前進に活用してほしい。
2	タイトル	自分達の仕事の振り返りとして、マニュアルの見直しと活用を進めていただきたい
	内容	施設の運営に当たって必要とされる一通りのマニュアルは作成されており、職員に対しても配布、周知が行われているが、長い歴史のある施設であり、マニュアルの見直しがされたときにマニュアルに見直しの日付が書かれていないことから現在のマニュアルがいつ見直されたかわからない状態となっているので、今後計画的に見直しをして、少なくとも1年に1回は見直すことを考えて取り組んでいただきたい。見直したときにはマニュアルの最後に見直した日付を入れていつ見直しがされたかわかるようにしてマニュアルの活用をしていただきたい。
3	タイトル	利用者の就労が困難な現状を打開するため地域で利用者が安定して自立できるような今後の取り組みに期待する
	内容	中小企業の障害者雇用も広がり求人数は増えているが、職場見学や実習などを経て26年度は1人にとどまった。求人の動向として、IT分野などの即戦力として精神障害者や発達障害者を内定する企業が多く、知的障害者のハードルは高く、就労移行の成果がなかなか出づらい状況となっている。事業所では、活動の原点である資源回収など地域に利用者の就労の場を作り給料の確保ができるよう考慮しているが、今後、地域農家チームや地域の介護や福祉の事業所との連携した取り組みなど、利用者が安心して継続できる就労の場の創出も期待される。

〔全体の評価講評：多機能型事業所〕

平成27年度

《事業所名：プラタナス》

No.	特に良いと思う点	
1	タイトル	利用者の表情が闊達であり、利用者を尊重し、一人ひとりを大切にしていることが実感される施設である
	内容	「利用者の権利擁護」という理念に基づいた文章が作成されており、それに沿って利用者の支援が行われている。「利用者の権利擁護」の全文にルビが振ってあり、利用者への説明も行われているなど、支援の環境として、障害者の権利擁護を重視する姿勢が感じられる。こうした中で、利用者としても安心して支援が受けられる環境が整っている。評価の訪問時にも、利用者の表情が明るく、他者を受け入れてくれていると感じられた。また、男性職員の割合が少ない中でも、同性介護が確実に行われており、きめ細かな配慮がされている。
2	タイトル	法人内の事業所との連携により利用者主体の自立した生活に向けた取り組みを行っている
	内容	法人には就労移行支援、自立訓練、就労継続支援B型を支援している他事業所のほかに、共同生活援助など多様な事業所を持っている。利用者から何を目標にしたいかを確認する自立訓練プログラムでは、一人ひとりのペース合わせた支援を行っている。本人と面談しながら一緒に取り組み、他事業所の就労継続支援B型で実習した後、本人の意思で移行に取り組んでいる。社会性を強化したい方には、生活介護や自立訓練に入り社会性が身に付いてから再度B型に移るなど、法人内の連携により、利用者主体の自立した生活に向けた取り組みを行っている。
3	タイトル	利用者支援の充実に向け、市内の障害者施設や多様な関係団体との連携を進めている
	内容	当施設の利用者は、生活介護が多くを占め、週末の余暇活動や、ショートステイなど、多様な資源を活用して地域での生活を継続しているケースが多い。こうしたことから、市内各施設との連携が必然的に進展するようになり、利用者を介して、外部資源とのネットワークが構築されつつあり、相談や情報交換の機会も進展している。経営層は、こうしたネットワークを強化し、障害者にとって暮らしやすい地域となるよう、当施設の特徴を活かした地域貢献を進展させたいと考えている。
No.	さらなる改善が望まれる点	
1	タイトル	災害時の地域との協力関係など、より一層地域との良好な関係を構築していってほしい
	内容	開設して2年目の施設であり、建設時には地域で反対運動もあった。現在も、日常的な関わりの少ないエリアなどでは、必ずしもスムースなコミュニケーションが図りにくいところも残っている。一方で、施設が運営を始めてからは徐々に理解者が増えていることも事実である。そのような人をもっと増やし、反対していた人にも理解していただけるよう、地域との協力関係を構築していくことが必要と思われる。例えば、災害時に施設を利用できるよう継続的に情報発信し、特定施設（二次避難所）をめざすなど、地域に必要とされる取り組みを進めたい。
2	タイトル	特徴ある生産設備を、利用者の新たな作業と就労の場の確保のために活用できるよう期待したい
	内容	利用者は、作業を通じ、社会に役立つことや食べ物の大切さ、衛生面のルールなど、多様な社会性を身に付けている。困難な作業では、丁寧に早くできるよう、自宅で練習をし、その成果を発揮する利用者もみられる。開設時から、自動の菓子生産機械が設置されており、専門性が要求される操作手法について調整を終え、商品開発の課題の整理に着手している。広く地域内外の人材の活用や法人内の他事業所と連携により、新たな菓子製造を通した多様な就労の確保が実現するよう、その活用に期待したい。
3	タイトル	バオバブとの強固な補完関係を保ち、地域で実現すべき福祉の具体的な姿を常に確認する必要がある
	内容	法人の出発点となったバオバブは今年40周年を迎える。昨年発足した姉妹施設のプラタナスは、両施設があることで、障害を持った人が、自分らしく地域で暮らしつづけるステージを地域に広げ、障害者や家族の希望を支えている。運営としては2つの施設にわかれてはいるが、マネジメントの共通課題も多く、"共に生き共に働く"共通理念のもと、相互に応援団となって一体的運営を行い、利用者本位の福祉の実現が達成されることが期待される。徐々に組織としても大きくなる中で、めざす姿を常に確認し、その実現に貢献する経営と運営の継続を期待したい。

6．総合的な感想について

平成２９年度
事業所名：グループホーム優朋

1．日頃感じている施設に対する意見・要望

NO.	意見
1	大変満足になるには、もっと自分が頑張る。
2	新聞回収の仕事をしている。とても楽しい。
3	・休日に外に出掛けることで気分転換になって楽しい。 ・出掛けることが大好き。 ・グループホームの行事には楽しく参加している。 ・自分のペースで生活ができているので不満はない。
4	下で折り紙するのが大好き。
5	ここはいいなあ。 気持ちが楽。みんなと仲良くできる。 みんなで食べ物を買いに行ったりする。
6	皆と一緒に生活ができて楽しい。

2．調査について気づいた点

NO.	意見
1	特にない。
評価機関コメント	評価においては、利用者の聞き取り調査は、決して事業所の実態を表すというよりはむしろ、利用者が事業所の取組みをどのように感じているか、取り組みが利用者に伝わっているか、を表すものととらえている。そうした意味で、事業所の更なる品質向上むけたヒントを得ることができる。 調査方法としては、特に、知的障害者の方への対面による聞き取り調査は、初めての調査員に対する緊張や、言語によるコミュニケーションの限界もあることを踏まえる必要がある。

7．生活の様子

NO.	現地の状況・感じられたこと
	＜リビング・共用部分＞
1	・玄関からリビングまで、清掃、整理整頓が行き届いており、大変快適な居住空間となっている。
2	・利用者が帰宅すると、リビングに顔を出してあいさつし、それぞれの居室に帰っている。
3	・数人の利用者が食事までの間、リビングで職員と会話しながら、穏やかに過ごす姿もあった。
	＜居室＞
1	・利用者それぞれの個室があり、身の回りの生活用品が整頓されて保管されている。
2	・6畳程度の広さがある部屋は、窓から空が見え、解放感がある。
3	・個室には、思い思いに、ベッドや布団、テレビなどを置き、プライバシーが尊重されている。
	＜感じられたこと＞
1	・利用者をよく知るご夫婦の世話人の、控え目で温かい声かけ・見守りが行き届いている。
2	・利用者の落ち着いた表情、穏やかな笑顔がみられ、とてもリラックスしている。
3	・調査においても、言葉のやりとりがスムースで、コミュニケーションが促された。
4	・自分ひとりにもなれる、見守る仲間や世話人もいる、一人ひとりのペースで選択できる居住環境の可能性を感じた。